

ウィトゲンシュタインの『哲学的探究』を読む

——「名前」に係わる部分——

黒 崎 宏

以下は『哲学的探究』の中で、特に「名前」に係わる部分を、独断と偏見であるかも知れないという事を恐れずに、読み且つ解説したものである。私としてはそれなりに、一点の疑惑も残さずに、読み解きたいのである。徹底的に解説したいのである。そのかわり、冗長であると思われる所や強引であると思われる所も、あるであろう。おおかたの御批判を乞いたい。

なお、[] は私の挿入である。また、[] をとばして読んでも、文章は通じるようになっている。原文のイタリックにはアンダーラインをつけてある。

39. しからば何故人は、明らかに名前ではないこの「これ」という語を、名前であるとしようとするのか?——それは、まさしく、それは名前ではないから、なのである。何故なら人は、一般に「名前」と呼ばれている〈もの〉に対し、[それは名前ではない、と言って、] 反対したと思うから。そして人は、その反対を表現して、こう言う：名前と言うものは、本来、単純なるものに付けられなくてはならないのである。そして人はこの主張を、例えば、以下のようにして基礎づけるかも知れない：通常の意味に於ける名前——固有名——としては、例えば、[剣の名前である]「ノートゥング」という語がある。[(日本人ならば、例えば、「草薙の剣」を考えればよからう。)]「ノートゥング」という剣は、諸部分が或る一定の仕方で組み合わされて出来ている。[それ故、] もしそれらの諸部分が別の仕方で組み合わされるならば、[或るいは、それらの諸部分がバラバラにされるならば、それはもはやノートゥングではない。したがって、その場合、] ノートゥングは [既に] 存在しないことになる。さてしかし、「ノートゥングは鋭い刃を持っているのである。」という命

題は、ノートゥングが完全な姿で存在しようと、既に破壊されてしまっ
て「姿を消して」いようと、明らかに意味を持っている。ところが、も
し「ノートゥング」が或る〈対象〉の名前であるならば、ノートゥング
が破壊されてしまえば、この対象はもはや存在しない事になるのである
から、「[「ノートゥング」という] 名前には〈対象〉が対応しない事にな
り、したがって「[「ノートゥング」という] その名前は意味を持たない
事になろう。しかしそうすると、「ノートゥングは鋭い刃を持っている
のである。」という命題の中には、意味を持たない語が入っている事にな
り、それ故、この命題 [全体] が無意味になるであろう。さてしかし、
この命題は [「ノートゥングが破壊されてしまっても、] 意味を持って
いるのである；それ故、「[「ノートゥング」は或る〈対象〉の名前ではあ
り得ない (背理法)。さて、ノートゥングが破壊されてしまっても意味を
持っている] この命題を構成している語には、常に何んらかの対象が対
応してなくてはならない。[それ故、この命題の中には「ノートゥング」
という語は入っていないのである。] かくして「ノートゥング」
という語は、意味の分析によって消滅し、その代わりに、[ノートゥン
グを構成している多くの] 単純なるものを名ざす語が、登場しなければ
ならないのである。我々がそれらの語を「本来の意味での名前」と呼ぶ
のは、全く正当であろう。

40. 先ず、以上のような思考過程の問題点を述べよう。それは、もし
名前に何も対応していなければ、その名前は意味を持っていない、とい
う事である。——ここで大切なことは、もし人が [或る名前の] 「意味
(Bedeutung)」という語でその [或る] 名前に「対応」している〈もの〉
を表わしているならば、「意味」という語は誤用されているのだ、とい
う事を確認することである。もし人が [或る名前の] 「意味」という語
でその [或る] 名前に「対応」している〈もの〉を表わしているならば、
彼は、名前の意味と名前の担い手 (Träger) を取り違えているのである。
もし、N. N. 氏が死ねば、人は、その名前の担い手が死んだ、と言うの
であって、その名前の意味が死んだのだ、とは言わないのである。その
名前の意味が死んだのだ、と言うことは、無意味であろう。何故ならば、
[もし、その様に言うとするれば、] 名前は意味を持つことを止め、「N. N.
氏は死んだ。」と言うことは無意味になろうから。

41. 第15節に於て我々は、第8節の言語に固有名を導入した。[Aが石を積むときに用いる種々の道具には夫々或る記号が付いている、とされたのである。そしてその記号が、その道具の「固有名」である訳である。] さて、[固有名である] 名前「N」を持った或る道具が壊れた、としよう。[しかし、] Aはその事を知らないので、Bにその記号「N」を示した。この場合、この記号は意味を持っているのか、いないのか？——Bは、この記号を示されたとき、何を為すべきなのか？——我々は、かかる事態に対して [どう対処すべきかを]、何も取り決めていなかったたのである。[ここで] 人は問うかもしれない：Bは何を為すであろうか？ さて、おそらくBは、途方にくれて棒立ちになるか、或るいは、Aに壊れた破片を示すであろう。ここで人は言うかも知れない：「N」は無意味になった；そしてこの事は、我々の言語ゲームに於いては、この記号「N」には（我々が或る新しい使用を与えるのでないならば、）もはや如何なる使用も存在しない、という事を意味するであろう。また、如何なる理由からにせよ、その道具に或る別の名前が与えられ、そしてその言語ゲームに於いては、記号「N」はもはや使わないとすれば、やはり「N」は無意味になるであろう。——しかし我々は、もし、道具が壊れたのに、Aは[それを知らずに] その道具の記号を示すとすれば、Bはそれに対する答えとして、首を振らなくてはならない、という取り決めを考える事もできる。——この場合には、人は言うことが出来よう：命令「N」は、その道具はもはや存在しないときでも、言語ゲームに受け入れられるのであり、そして記号「N」は、その担い手が存在しなくなっても、意味を持つのである。

42. しかし、例えば、決して道具には用いられない名前もまた、いま問題の[言語] ゲームに於いて意味を持つのであろうか？——そこで、「X」がその様な記号である、としよう。そして、Aがこの記号「X」をBに示す、としよう。——さて[この場合]、その様な記号もまたこの言語ゲームに受け入れられ、Bは例えばその記号に答えて首を振らなくてはならない、という事になろう。（この様なことを、人は二人の間の一種の冗談であると考える事が出来よう。）

43. 「意味 (Bedeutung)」という語が用いられる——全ての場合ではな

いとしても——大多数の場合において、人はこの語をこう説明することが出来る：或る語の意味とは、言語 [ゲーム] に於けるその語の使用 (Gebrauch) である。

そして人は名前の意味を、時には、その担い手を指示する事によって、説明するのである。

[この節には、いろいろと問題がある。]

(1) この節は、ウィトゲンシュタインの意味論の根幹を述べているものとして、非常にしばしば引用されている。しかしこの節は、「名前」、特に「固有名」を念頭においての議論の中にあることに、注意しなくてはならない。もっともウィトゲンシュタインに於いては、一般には普通名詞として扱われる「板石」も「名前」であり、一般には固有名詞として扱われる「ノートゥング」も「名前」である。しかも彼に於いては、「名前」は「語」であり、「語」と「文」の区別も定かではない。したがって、この第43節で言われていることを、「名前」乃至「固有名」の枠を超えて一般化することは、必ずしも不当ではない。しかしウィトゲンシュタイン自身にとっては、この節はそれほど重いものではなかったのではないか。

(2) 私は、そのままでは「或る語の意味とは、言語に於けるその語の使用である。」となるところを、「或る語の意味とは、言語 [ゲーム] に於けるその語の使用である。」として、[ゲーム] という語を挿入した。私は、ここは当然そうすべきであると思うし、『探究』の中には、「言語ゲーム」と言うべき所を単に「言語」と言っている箇所が他にもある。(例えば、第116節)

(3) 「「意味」という語が用いられる——全ての場合ではないとしても——大多数の場合に於いて」と言うとき、そこで考えられている例外的な場合は、一体どういう場合なのか？ それは、「意味」の意味を問う場合であろう。それでは、その場合、ウィトゲンシュタインはどう言うのであろうか？ 彼はおそらく「「意味」の意味とは、言語に於ける「意味」の使用である。」と言うのではないか。即ち、この場合には、「言語ゲーム」ではなく「言語」と言うのではないか。彼は、原書18頁の脚注において、こう言っている：「私は「ぶぶぶ」という語で「雨でなければ、私は散歩に行くでしょう。」を意味することが出来るか？——ただ言語の中でのみ、私は或る事を [他の] 或る事で意味する事が出来るの

である。」

44. 我々は〔第39節で〕言った：「ノートゥングは鋭い刃を持っているのである。」という命題は、たとえノートゥングが既に破壊されてしまっているように、意味を持っている。さて、それがそうであるのは、その命題が用いられる言語ゲームに於いては、名前は、その担い手が存在しなくても、用いられるからなのである。しかし我々は、名前を含んだ言語ゲーム（即ち、我々が確かに「名前」とも呼ぶであろう記号を含んだ言語ゲーム）で、その名前は、その担い手が存在するときのみ用いられるものである言語ゲームを、想像することが出来る；それ故我々は、指示の振舞を伴った指示代名詞によって常に置き換え可能な名前を含んだ言語ゲームを、想像することが出来るのである。〔但し、その様な名前が具体的に如何なるものであるかは、私には不明である。〕

45. 指示代名詞「これ」が担い手無しになる事は有り得ない。[そこで、]人は言うかも知れない：「これが存在する限りに於いて、これが単純なものであると合成されたものであると」、「これ」という語もまた意味を持つ。」——しかし、この事が「これ」という語を名前にするわけではない；この事が「これ」という語を名前にするなどという事は、とんでもないことである；何故なら、名前は、指示の身振りを伴って用いられるのではなく、ただ指示の身振りによって説明されるだけなのであるから。

46. さて、名前は本来単純なものを表わす、という〔間違った〕考えの背後には何があるのか？——

ソクラテスは（『テアイテトス』〔の39〕において）こう言っている：「即ち、もし私が思い違いをしているのでないならば、私は、幾人かの人達から以下のように聞いた：我々および他の全てのものがそれらによって構成されている基本的諸要素（*Urelemente*）——とも言うべきもの——に対しては、如何なる説明も存在しない；何故ならば、〔基本的諸要素のような〕それ自体に於いて存在するものは全て、ただ名前によってのみ表わすことが出来るのであり、「それは存在する」とか「それは存在しない」とかいった、その他の仕方では表わすことが出来ないから。（中略）

それ自体に於いて存在するものは、…… [ただ] 名指されねばならないのであり、それ以外の規定を与えることは出来ないのである。それ故、如何なる基本的諸要素についても、説明的に語るという事は不可能なのである；何故ならば、基本的諸要素については、単なる名指し以外には何も存在しないから；基本的諸要素は、ただ名前を持っているのみなのである。しかし、この様な基本的諸要素によって構成されたものは、それ自体組み合わせされた形成物であるように、それらの基本的諸要素の名前 [によって構成されたものそれ自体] も組み合わせられて [一つの形成物をなし、この形成物が基本的諸要素によって構成されたものに対して] 説明的な語りになるのである；何故ならば、語りの本質は、名前の組合せであるから。] [(ここで言われている「幾人かの人達」が誰であるかはともかく、ここで語られている考えは、テアイテソスの考えであってソクラテスの考えではない、という事に注意せよ。但しその考えは、全く『論考』の考えなのである。なお、翻訳はワイトゲンシュタインが使っていた Preisendanz の独訳からの重訳である。したがって、原文からの翻訳としては不適切なところがある。)]

これらの基本的要素は、ラッセルの「個体 (individual)」でもあり、また私の (『論考』における) 「対象 (Gegenstand)」でもあるのである。

47. しかし、実在を構成する単純な構成要素とは何か？—— [例えば、] 椅子を構成する単純な構成要素は何か？——椅子を構成する単純な構成要素は、木片であろうか？ 或るいは、分子であろうか、原子であろうか？—— [かく言うとき] 「単純」とは、「構成されていない」という事である。そこで問題は、「構成されていない」とは、如何なる意味で「構成されていない」という事なのか、という事である。[したがって問題は、「単純」とは、如何なる意味で「単純」なのか、という事である。] [したがって、] 「椅子を構成する単純な構成要素」について [それが如何なる意味で「単純」なのかを規定せずに、] ただ「絶対的な意味で」語るという事は、全く意味がないのである。

或るいは：この木やこの椅子の私の視覚像は、部分から出来ているのか？ そして、その単純な構成要素は何なのか？ 多色は [色による] 一種の構成である；別種の構成としては、例えば、線分による破線で描かれた輪郭がある。そして人は、曲線は上昇曲線と下降曲線によって構成されている、と言うことが出来る。

私が或る人に、[それについて] 更に説明する事なしに「私が今眼前に見ているものは、構成されている。」と言えば、彼が「君は「構成されている」という語で何を意味しているのか？」「構成されている」という語は、実に、考え得る全ての事を意味し得るのである！」と問うとしても、当然である。——「君が見ているものは、構成されているか？」という問いは、「構成されている」という語の如何なる種類が——即ち、「構成されている」という語の如何なる種類が——問題であるのか、という事が既に確立しているならば、確かに意味を持っている。もし人が、[木の] 幹のみではなく枝をも見ているならば、この事は、木の視覚像は「構成されて」いなくてはならない、という事を意味している、という事が確立されているならば、「この木の視覚像は単純か構成されているか？」という問いと、「この木の視覚像の単純な構成要素は何か？」という問いは、明確な意味——明確な使用——を有するであろう。そして、第二の問いに対しては、答えは勿論「枝」（これは、「ここに於て、この「単純な構成要素」は何と言われるのか？」という文法的な問いに対する、一つの答えであろう。）ではなく、例えば、個々の枝の記述である。

しかし、例えばチェス盤は、明らかに絶対的な意味で構成されているのではないのか？——君はきっと、[チェス盤は] 32個の白い正方形と32個の黒い正方形によって構成されている、と考えているのであろう。しかし我々は、例えば、チェス盤は白い色と黒い色および正方形の網模様によって構成されている、とも言えないであらうか？ [言える。] そして、もしここには [種々様々な] 全く異なった見方が存在するとすれば、それでも君は依然として、チェス盤は [明らかに] 絶対的な意味で「構成されている」、と言うのであらうか？ [言いはしないであらう。] ——或る一定の [言語] ゲームの外で「この対象は構成されているか？」と問うことは、かつて或る青年がしていた事に似ている。彼は、或る動詞が或る例文に於て、能動形で用いられているのか、受動形で用いられているのかを、述べねばならない事になっている [(これは簡単である。)] のに、例えば「眠っている」という動詞について、[それを例文から外し、ただ、] それが能動的な何かを意味しているのか、受動的な何かを意味しているのかと、頭を悩ましていたのである。

「構成されている」という語（それ故また「単純」という語）は、我々によって、無数の異なった、[しかし] 相互に様々な仕方に関連している、

仕方、用いられているのである。(チェス盤の升目の色は、単純なのか；或るいは、それは〔象牙色である場合、〕純粋な白と純粋な黄色によって構成されているのか？そして、白色光は単純であるのか；或るいは、虹の色によって構成されているのか？——2 cmのこの線分は単純であるのか、或るいは、それぞれ1 cmの二つの線分によって構成されているのか？しかし、何故2 cmのこの線分は、3 cmの線分と逆向きに置かれた1 cmの線分によって構成されている、と言えないのか？)

「この木の視覚像は構成されているのか、そして、その構成要素は何か？」という哲学的な問いに対する正しい答えは、こうである：「その答えは、君が「構成されている」という語で何を理解するか、という事に懸かっている。」(そしてこの答えは、勿論、答えにはなっていない。この答えは、問いの〈差し戻し〉なのである。)

48. 第2節の方法を〔ソクラテスが〕『テアイテス』で言っている事〔(第46節)〕に用いよう。〔即ち、第2節の様な言語を用いた言語ゲームで、ソクラテスが〕『テアイテス』で言っている事が実際に適合する言語ゲームを、考えよう。その言語は、一つの面上にある〔色々な〕色の付いた〔複数の〕正方形の〔様々な〕組合せを表現するのに用いられるのである。それらの正方形は、チェス盤の様な形をした複合体を作っている。〔正方形には、〕赤い正方形、緑の正方形、白い正方形、黒い正方形、の五つがある。〔そして、これらに〕〔対応して、〕その言語には「R」「G」「W」「S」の〔五つの〕語があり、これらの語の連なりが命題なのである。これらの語は、図1の順に連なって、正方形の配置を記述するわけである。

したがって、例えば命題「RRSGGGRWW」は、図2のような〔正方形の〕配置を記述しているのである。

ここにおいては、命題は、要素の複合体に対応した、名前の複合体であり；基本的要素は、〔白も黒も色だとしての、〕色の付いた正方形である。「しかし、これらの正方形は単純であろうか？」——私は、この言語ゲームに於て、〔これらの正方形よりも〕より自然に「単純なもの」と呼ぶべきもの〔がある事〕を知らない。しかし事情によっては私は、一色の正方形を、例えば、〔それと同じ色の〕二つの長方形によって構成されている、と言うであろうし；例えばまた、〔その〕色と〔その〕

形という〔二つの〕要素によって「構成されている」、と言うであろう。しかし「構成〔されている〕」という概念は、〔或る〕面を、〔それをカバーする〕より大きな面と、そこから差し引かれる〔べき、はみ出した〕面によって「構成されている」、と言われる程に拡張される事も出来るのである。〔ここで、〕力の「合成」とか、線分の外側の点による「分割」〔——いわゆる「外分」——〕とかについて、思い致せ；これらの表現は、我々には、事情によっては、小さいものを、それよりも大きいものによる構成の結果として把握し、大きいものを、それよりも小さいものの分割の結果として把握するという傾向がある、という事を示している。〔力の「合成」と線分の「外分」は、一直線上では、同じ事になる。詳しくは、それぞれの分野の本を参照の事。〕

さてしかし、私は、我々の命題〔「RRSGGGRWW」〕が記述している図形は、四つの要素から成り立っている、と言うべきなのか、九つの要素から成り立っている、と言うべきなのか、知らないのである；また、〔我々の〕命題「RRSGGGRWW」は、四つの文字から成り立っているのか、九つの文字から成り立っているのか？——そして、この命題の要素は、何なのか：文字の型なのか、文字なのか？——そのどちらであると答えるにせよ——もし我々が、〔哲学的問題を引き起こす〕特別な場合にだけ誤解を避けるの〔でよいの〕ならば——そんな事はどうでもよい事ではないのか？！

49. しかし我々は、これらの要素を説明（即ち、記述）する事は出来ないが、名指す事だけは出来る、という事は、どういう意味なのか？この事は、例えば、次のような事を意味し得るであろう：複合体の記述は、もしその複合体が、極端な場合として、ただ一つの正方形からのみ成り立つときには、単にその色の付いた正方形の名前になる。

ここで人は——こう言うとき〔人々を〕いとも易々とあらゆる種類の哲学的迷信に導くのではあるが——言うかも知れない：記号「R」或るいは「S」等々は、ある時は語であり、またある時は命題である。しかし、記号が「語であるか命題であるか」は、その記号が言われる或るいは書かれる状況に依存するのである。例えばAが、Bに、色の付いた複合体を記述〔して報告〕しなくてはならない〔事になっている〕時に、もしAが〔——その複合体が、極端な場合として、ただ一つの正方形からの

み成り立っている——]「R」という語のみを用いるならば、その時は我々は、この語「R」は、記述——命題——である、と言うことが出来よう。しかしAが、例えば、語とその意味を覚えているときには、或るいは、他人に語の使用を教えていて、直示的教示で語を発音するときには、我々は、それらの語は命題である、とは言わないであらう。この様な状況に於いては、例えば語「R」は記述ではない；人は語「R」でもって或る要素を名指すのである。——しかし、だからといって、人は要素をただ名指す事が出来るのみである、と言うことは奇妙であらう！ 名指す事と記述する事は、決して同一平面上に在るものではない：名指す事は、記述する事に対しての、予備的作業なのである。名指す事は、それだけでは、言語ゲームに於ける動きでは全くない；——それは丁度、チェスの駒をチェス盤上に置くことが、チェスに於ける動き(手)ではないのと同じである。人は言うことが出来る：ものを名指す事によっては、未だ何事も行なわれていないのである。ものは、[言語]ゲーム中でないならば、名前すら持ち得ないのである。この事は、フレーゲが、語は命題の中に於てのみ意味を持つ、と言うときに意味していた事でもあるのである。(『論考』3.3をも参照。)

50. さて我々が要素について、それは「存在する」とも「存在しない」とも言うことが出来ない、と言うとき、それはどういう意味なのか？——人は言うかも知れない：もし、我々がそれについて「存在する」とか「存在しない」とか言う全てのものが、諸要素間の[様々な]結合が〈成立している〉か〈成立していない〉か、という事であるならば、要素[それ自体]が「存在する」(とか、「存在しない」とか)と言うことには、意味が無い；それは丁度、我々がそれについて「破壊する」と言う全てのものが、諸要素を分離するという事であるならば、要素[それ自体]について「破壊する」と言うことには意味が無い、という事と同じである。[(第46節を参照の事。)]

しかし、[これに対し、]人は[また]言うかも知れない：人は要素について、「存在する」と言うことは出来ない；何故ならば、もしそれが存在しなければ、とにかく人はそれに命名する事すら出来ないのであり、したがって、それについては全く何も語ることが出来ないのであるから。[したがってそれは、「存在しない」という事は有り得ない。それ故それ

は、「存在する」と言うことも無意味なのである。要するに人は、要素については、「存在する」とも、「存在しない」とも、言えないのである。]——さてしかし、我々はこれと類似の場合を考察しよう！ 人は或る物について、それは1 mである、とも、それは1 mではない、とも、言うことが出来ないのである；そして、この或る物とは、[実は] パリのメートル原器である。——しかし、かく言うことによって我々は、勿論、メートル原器に何らかの奇妙な特性を与えたわけではない。我々はただ、メートルを単位にした測定という[言語]ゲームに於けるメートル原器の固有な役割を、明らかにしただけなのである。[物の長さとは、メートル原器との比較で決まるものである。したがって、メートル原器の長さとは、メートル原器との比較で決まるものである。しかし、メートル原器をメートル原器と比較するという事には、それは自分を自分と比較することであるから、意味が無い。それ故、メートル原器については、そもそも長さを言うことには、意味が無いのである。したがって、メートル原器については、「1 mである」とも、「1 mではない」とも、言えないのである。]——[今度は、]メートル原器と似た仕方では、パリには色原器というものも保存されている、と想像しよう。その場合には我々は、「セピア」という色について、例えば]こう説明する：「セピア」とは、ここに空気を遮断して保存されているこのセピア原器のこの色[と同じ色]を意味する。それ故、このセピア原器については、それはセピア色である、と言うことも、それはセピア色ではない、と言うことも、意味が無いであろう。

我々は、[今]セピア原器について言った事を、次のように表現することが出来る：この[色]見本は、色についての我々の言語の道具である；それは、[それを用いて行なわれる言語]ゲームにおいて表現されるのではなく、[それを用いて行なわれる言語ゲームにおいての]表現の手段なのである。——そして丁度同じ事が、第48節の言語ゲームに於ける要素についても、当てはまるのである。即ち、我々が、或る要素に命名して「R」という語を言うとき、我々はそれによってその要素に、我々の言語ゲームに於ける或る役割を与えたのである；今やその要素は、表現の手段なのである。そして、「もし、それが存在しなければ、それは名前を持ち得ないであろう。」と言うことは、「もし、それが存在しなければ、我々はそれを、我々の[言語]ゲームに於いて用いること

が出来ないであろう。」という事と、結局は同じ事を言っているのである。——[実は、「存在する」とも「存在しない」とも言えないにも拘らず、]存在しなければならない、と思われる〈もの〉は、言語に属するのである；それは、我々の[言語]ゲームにおける範例(パラダイム)であり、[全てのものが]それと比較される或る〈もの〉、なのである。そして、この事の確認は、或る重要な確認である、と言えよう；しかし、その重要な確認とは、我々の言語ゲームに関する確認であり——我々の表現方法に関する確認なのである。

51. 第48節の言語ゲームの記述に於いて私は、記号「R」「S」等々は様々な色の正方形に対応している、と言った。ではそれらの対応は、[一体]何に於いて成り立っているのか；如何なる意味で人は、それらの記号は様々な色の正方形に対応している、と言えるのか？ 第48節の説明では、それらの記号と我々の言語に於ける或る言葉(「赤い正方形」「黒い正方形」等々)の間の関係のみを、作り出ただけなのである。——さて、第48節の言語ゲームに於ける「R」「S」等々の記号の使用は、第48節の説明とは異なった仕方で、しかも範例を直接指示することによって、教えられるであろうという事は、前提されていた。その通りである；しかし、言語の実践に於いて或る要素が記号に対応する、と言う事は、一体どういう事なのか？——それは、色の付いた正方形の複合体を記述する人は、赤い正方形が在る時には常に「R」と言い、黒い正方形が在る時には常に「S」と言い、等々、という事なのか？ しかし、もし彼が、その様な記述を間違え、黒い正方形を見て誤って「R」と言うとするれば、どうであろう——この場合、それが誤りであるという事の規準は、何なのか？——或るいは、「R」は赤い正方形を表わしている、という事は、その言語を用いている人には、記号「R」を用いる時には常に、赤い正方形が念頭に浮かぶという事なのか？

[事態を]より明確に見るためには、我々はここに於いて、無数の似た場合に於いてと同様に、事態の細部をしっかりと見極めなくてはならない；事の成りゆきを子細に観察しなくてはならない。

52. もし私が、ネズミはごみにまみれたネズミ色のぼろ布から自然発生的に生まれる、と仮定したければ、如何にしてネズミはその様なぼろ

布に身を隠し得るのか、如何にしてネズミはその様なところに現れ得るのか、等々、という事を目指して、その様なほろ布を調べる事は、理に叶っているであろう。しかし、もし私が、ネズミはその様なものからは発生し得ない、と確信するならば、その様な調べは恐らく余計であろう。

しかし、我々が先ず理解する事を学ばねばならない事は、哲学に於いて [は]、細部に就いてのその様な [言わば科学的] 調べに対して反対するもの [があるのであるが、一体それ] は何であるか、という事である。

53. さて、我々の第48節の言語ゲームには、様々な可能性がある。即ち、その言語ゲームには、〈そこに於て我々が、或る記号について、「それがシカジカの色の正方形を名指す」と言うであろうような、様々な場合〉があるのである。我々がその様に言うであろうような場合とは、例えば我々が、この言語を用いる人が、その記号の使用をカクカクの仕方で教え込まれた、という事を知っていたとき、である。或るいは、その記号にはこの要素が対応している、という事が、例えば、或る表の形で書き留められていたとき、とか、その様な表が、この言語を教わるときに用いられ、また、ある種の論争に際しては、それに決着をつけるために引合いに出されるであろうとき、である。

しかし我々は、その様な表はその言語を [日々] 用いるときの道具である、という事も想像できる。そのようなときは、複合体の記述は次のようになる：複合体を記述する人は、或る表を携えていて、[先ず] 複合体の各要素を [順に] その表の中で探し、そしてその要素から表の中で [対応する] 記号に移行するのである。(そして、その記述が与えられる人は、今度は記述の記号を、表 [を逆に辿る事] によって、色の付いた像に翻訳する事が出来るのである。) 人は言うかも知れない：この様な表は、ここに於いては、他の場合には記憶と連想が演じる役割を引き受けるのである。(我々は「赤い花を一つ持ってきてくれ!」という命令を、通常は、[先ず「赤」という記号を色の表の中に見つけ、そこから、その表の中で対応する色としての] 赤い色を色の表の中に見つけ、そして、そこに見つけた色 [と同じ色] の花を持って行く、という様には遂行しない；しかし、或る一定の色調の赤を選ぶ、或るいは、或る一定の色調の赤を調合する、ということが問題であるときには、我々は色の見本や色の表を用いる、という事が起きるのである。)

もし我々が、その様な表をその言語ゲームの「規則の表現」と呼ぶとすれば、人は次のように言うことが出来る：我々が言語ゲームの規則と呼ぶものは、その言語ゲームに於いて、非常に種々様々な役割を演じ得るのである。

[要素と記号との関係は、事象ではなく、規則なのである。そして、総じて言えば、事象は科学の対象であり、規則——文法——は哲学の対象なのである。したがって、哲学的な問題に対しては、科学的な探究は的外れになるのである。]

54. それでは、如何なる場合に我々は「ゲームは或る一定の規則に従って行なわれる」と言うのか、という事を考えよ！

規則は、ゲームを教える補助手段であり得る。[例えば,] 規則が生徒に知らされ、その応用が稽古させられる。——或るいは、規則は、ゲームそのものの道具である。[(第53節を参照。)] ——或るいはまた：教育に於いてもゲーム自体に於いても、規則の適用は認められないし；規則は、表の形にも記録されていない。[しかしこの場合,] 人は、他人が如何にゲームをしているかを良く見ることによって、ゲームを学ぶのである。しかし [それでも] 我々は、そのゲームはシカジカの規則に従って行なわれる、と言う；何故なら観察者は、その規則を [他人が行なう] ゲームの実践から読み取ることが出来るから。——それは丁度、観察者は、自然法則を [他人が行なう] ゲームの行動から読み取ることが出来るように、である。——それではこの場合、如何にして観察者は、ゲーム者の間違った行動と正しい行動を見分けるのか？——ゲーム者の間違った行動と正しい行動の間には、特徴的な違いがあるのである。[例えば,] 言い間違えを訂正する人の特徴的な振舞いについて考えよ。或る人が言い間違えを訂正するとき、たとえ我々が彼の言語を理解しないととしても、その事に気が付くことは可能であろう。

55. 「言語に於ける名前が表わすものは、破壊不可能でなければならない：何故ならば、人は、破壊可能なものは全て破壊され [尽くし] ている状態を、記述出来ねばならないのであり；そして、この記述には [当然様々な] 語があるのであるが、そのとき、それらの語に対応するものは、破壊されてはならないのであるから、何故なら、さもないと、それ

らの語は意味を持たないであろうから。〔破壊されてはならない〈もの〉に対応する語は、その〈もの〉の名前に他ならない。〕」私が、自分が腰掛け
ている枝を、[もとの方で]切断する事など、あってはならないのである。

さて人は[この推論に対し]、勿論直ちに、次のように言って反論するかも知れない：確かにその様な、[破壊可能なものは全て破壊され[尽く]ている状態の]記述それ自体は[可能であり、それ故それは]、破壊を免れていなくてはならない；——とはいえしかし、その記述の[様々な]語に対応するものは、したがって、もしその記述が真であるならば、破壊されてはならないものは、それらの語に意味を与えるもの——それなくしては、それらの語は意味を持たないもの——なのである。〔(ここに於ける二つの意見は、結局こうである。前者は、それらの語は意味を持つのであるから、(そして、語の意味とは語に対応するものであるから、)それらの語に対応するものは破壊されてはならない、と言い；後者はこの意見に反対して、それらの語に対応するものは、(破壊可能なものは全て破壊され尽くしている状態の記述に用いられる語に対応するものであるから、定義上、)破壊されてはならないものであり、(そして、語の意味とは語に対応するものであるから、)それらの語に意味を与えるものである、と言うのである。しかし、何れにせよこれらの意見では、「語の意味とは語に対応するものである」という考えと、「語に対応するものは破壊されてはならない」という考えが、肯定されている。)——しかし〔(、と言ってワイトゲンシュタインは、これら二つの考えに反論する。)〕そうは言っても人は、或る意味では、彼の名前に対応するものではないのか。ところが彼は、破壊可能なのである〔。したがって、語に対応するものでも破壊可能なのである。〕；そして彼の名前は、[それに対応する彼という]その担い手が破壊されても、その意味を失わないのである。[したがって、語の意味とは語に対応するものではないのである。]——名前に対応していて、それなくしては名前は意味を失うもの、それは例えば——言語ゲームに於いて名前と結合して用いられる——範例なのである。〔〈担い手〉と〈範例〉は違うのである。そしてこの両者は、勿論、意味ではない。(第71節を参照。)]

56. しかし、もしその様な見本が言語には属していないとすれば、どうであろう？〔(第50節を参照。)]即ち、もし我々が、例えば、或る語が

表わす色を憶えているとすれば、どうであろう？——[ここで、人は言うかも知れない:]「もし我々が或る語が表わす色を憶えているとすれば、その色は、例えば我々がその語を言えば、我々の念頭に浮かぶのである。それ故[、我々の念頭に浮かぶ]その色自体は——我々が何時でもその色を思い起こすという事が可能でなくてはならないならば——破壊不可能でなくてはならない。」——しかし、それでは一体、何を我々は、我々はその色を正しく思い出した、という事の規準とみなすのか？——[しかし、]もし我々が、我々の記憶ではなく、或る見本を用いるとするならば、事情によっては我々は、見本の色が変わった、と言い、この事を記憶に基づいて判断するのではないか。[それは、そうである。]しかし我々は、事情によっては、(例えば)我々の記憶像が次第に薄れて行くという事をも、語り得るのではないか？[だが]我々は、記憶についても、見本に頼るのと同様に、頼るのではないか？(何故なら、人はこう言いたいであろうから:「もし我々に記憶がなければ、我々は見本に頼る事になろう。」)——或るいは我々は、例えば、[見本に頼るのと同様に、]或る化学反応にも頼るのではないか？それは、例えば、こういう場合である:君は或る一定の色「F」を塗らなくてはならない;そしてその色「F」は、化学物質XとYが化学反応を起こしたときに見える色なのである。——[しかし]その色が、或る日、君にはいつもよりもより明るく思われた、としよう;この場合君は、事情によっては、こう言うのではないか:「私は間違っているに違いない;[今日の]この色は確かに昨日の色と同じである。」この事は、我々は記憶が言うことを常にこれ以上控訴することが出来ない最高の法廷として利用するわけではない、という事を示しているのである。

57. [人は言うかも知れない:]「赤い物は破壊され得るが、しかし、[色としての]赤[そのもの]は破壊され得ない;それ故、「赤」という語の意味は赤い物の存在とは独立である。」——確かに、赤という色(色であって、色素ではない。)について、引き裂かれるとか砕かれるとか言う事には、意味がない。しかし我々は、「赤い色が消えた。」と言わないであろうか？[言う。]そして君は、もはや赤い物が存在しなくなっても、我々は赤い色を念頭に思い浮かばせる事が出来る、などという考えに、しがみついてはならない! この様な考えは、もはや赤い物が存在

しなくなっても、それでもなお赤い炎を引き起こす化学反応が存在するではないか、と言いたがっている様なものである。——何故なら、もし君がもはや赤い色を思い出すことが出来なかったなら、どうであろう？ [この場合には、何れの場合にも、その当の色が本当に「赤」であるか否かが不明なのである。] ——もし我々が、どの色が「赤」という名前を持っている色であるかを忘れているならば、「赤」という名前は我々にとって意味を失っているのである；即ち我々は、「赤」という名前で或る一定の言語ゲームをする事は、出来ないのである。そしてこの場合この状況は、我々は、我々の言語の手段である範例を無くしてしまった様なものなのである。

58. 「私は、「Xは存在する。」という [(或る意味では命題であり、また或る意味では命題ではない)] 語の結合 [のX] に入り得ないもののみを、「名前」と呼ぼうと思う。——そしてそれ故、人は、[赤は名前である以上、]「赤は存在する。」とは言えないのである。そしてその理由は、もし赤が存在しなければ、赤については、そもそも、語られ得ないであろうから。[したがって、「赤は存在しない。」とは言えないのであり、それ故、「赤は存在する。」とも言えないのである。]」—— [この論点は、]より正しくは、こうなる：もし「Xは存在する。」は、「X」は意味を持つ、という事と同じ事を意味すべきであるならば——「Xは存在する。」は、Xについての命題ではなく、我々の言語使用、即ち、語「X」の使用、についての命題なのである。

我々は、「赤は存在する。」という言葉は意味を持たないという事は、赤の本性について何事かを言っているのだ、と思うかも知れない。[そしてその何事かとは、] 赤はまさに「それ自体に於て」存在する [、という事なのである]。[赤は、独立存在——実体——である、という訳である。] これと同じ考え——「赤は存在する。」という言葉は意味を持たないという事は、赤についての [経験的言明ではなく] 形而上学的言明であるのだ、という考え——は、我々が例えば「赤は無時間的である。」と言うことの中にも、そして恐らくはもっと強く「赤は破壊不可能である。」と言うことの中にも、表現されているのである。

しかし我々は本来、「赤は存在する。」[という表現] を当にただ「赤」という語は意味を持つ。」という言明として、把握したいのである。或

るいは、恐らくより正しくは、「赤は存在しない。」[という表現]を「赤」という語は意味を持たない。」という言明として。ただ我々は、「赤は存在する」という表現は「赤」という語は意味を持つ」という事を語っている、とは言いたくないのであり；もし「赤は存在する」という表現が意味を持つならば、「赤は存在する」という表現は「赤」という語は意味を持つ」という事を語らねばならない、と言いたいだけなのである。[そして我々は、こうも言いたくないのである:] しかし、「赤は存在する」という表現は、「赤」という語は意味を持つ」という事を語ろうと試みると、矛盾に陥るといふ事、この事は、——赤は当に「それ自体に於て」存在するから、なのである。実は矛盾は例えば、「赤は存在する。」という命題は、「赤」という語の使用について何かを語るべきであるのに、[赤という]色[そのもの]について語っているかの如くに見える、という事の中にのみあるのである。——しかし実際には、我々はよく、或る一定に色が存在する、と言い、そしてこの事は、その色を持っている或るものが存在する、という事と同じ事を意味しているのである。そして、第一の表現は第二の表現より正確ではないわけではなく、特に「色を持っているもの」が物理的対象でない場合には、そうである。

59. 「名前は、ただ、現実の要素であるもの——破壊され得ないもの；如何なる変化に於いても同一であり続けるもの——のみを表わす。」——しかし、何がその様なものなのか？——我々が今の命題を述べたとき、我々には既にその様なものが心に浮かんだのではないのか！ [我々が今の命題を述べたとき、]我々は既に或る全く一定のイメージを——我々が用いようとする或る一定の像を——表現したのである。何故なら、経験は我々にその様な要素を示しはしないから。[だからこそ我々は、その様な要素を、いわば、想像しなければならないのである。] [実は経験的には]我々は、構成された物（例えば、椅子）の構成部分を見る[と云えば見る]のである。[そして例えば]我々は、背はその椅子の[構成]部分である、と言う；しかし、その部分それ自体が更に様々な木によって構成されているのである；ところが一方、脚は単純な構成部分なのである。我々はまた、変化し（破壊されもする）全体をも見るのであるが、しかしその際、その諸構成部分は変化せず[(破壊もされず)]にいたのである。[そして]我々は、それらの構成部分を素材として、現実のこ

の〔視覚〕像を作り上げるのである。〔「要素 (Element)」と「構成部分 (Bestandteil)」の違いに注意せよ。前者は形而上学的であり、後者は経験的である。〕

60. さて私が「私の箒はその角に立っている。」と言うとき、——この言明は、実は、箒の柄と箒の刷毛についての言明であるのか？ [対話者は言う：] 何れにせよ人はこの言明を、柄の位置と刷毛の位置を述べる言明によって、置き換えることが出来よう；そしてこの、柄の位置と刷毛の位置を述べる言明は、確かに、初めの「私の箒はその角に立っている。」という言明の、更に分析された形なのである。—— [ウィトゲンシュタインは問う：] しかし何故君 [原文では私] は、その、柄の位置と刷毛の位置を述べる言明を、「更に分析された〔形〕」と言うのか？—— [対話者は答える：] さよう、箒がそこに在るとき、この事は確かに、柄と刷毛が——相互に或る一定の位置関係を持って——そこに在らねばならない、という事を、意味している；そしてこの〔柄と刷毛が——相互に或る一定の位置関係を持って——そこに在らねばならない、という〕事は、以前は、「私の箒はその角に立っている。」という命題の意味 (Sinn) の中に言わば隠されていたのであるが、[今や、柄の位置と刷毛の位置を述べる] 分析された命題に於いて〔、はっきりと〕表明されているのである。[ウィトゲンシュタインは問う：] そうであるとすれば、「私の箒はその角に立っている。」と言う人は、本当は、柄はそこに在り、刷毛もそこに在り、そして、柄は刷毛に刺さっている、という事を意味しているのか？——もし我々が誰か或る人に、「[その場合] 君は、本当は、柄はそこに在り、刷毛もそこに在り、そして、柄は刷毛に刺さっている、という事を意味しているのか？」と問うたとすれば、おそらくその人は言うであろう：私は、特に箒の柄についても、或るいはまた、特に〔箒の〕刷毛についても、全く考えてはいなかった。そしてこれは、正しい答えなのである；何故ならその人は、特に箒の柄についても、或るいはまた、特に〔箒の〕刷毛についても、語ろうとはしていなかったのであるから。君が或る人に——「私にあの箒を持ってきて！」と言う代わりに、——「私にあの箒の柄とそれが刺さっている刷毛を持ってきて！」と言うと考えよ。これに対する〔彼の〕答えは、「君はあの箒が欲しいのですか？　そしてそうなら、何故君はその事を

その様に奇妙に表現するのですか？」ではないであろうか？——それでは[君は]、彼はその「私にあの箒の柄とそれが刺さっている刷毛を持ってきて！」という]更に分析された命題[の方]をより良く理解する[とでも言う]のであろうか？——人は言うかもしれない：この「私にあの箒の柄とそれが刺さっている刷毛を持ってきて！」という更に分析された]命題は、「私にあの箒を持ってきて！」という]通常の命題と同じ事を行なうのである；ただしより遠回りの仕方である。[そうであろうか？]——[そこで、]或る言語ゲームを考えよう。その言語ゲームに於いては、或る人に命令が与えられるのであるが、その命令とは、或る多くの部分から構成されている物を、運んだり、動かしたり、等々、する事を、命じるものののである。そしてこの事は、二つの仕方で行なわれるのである：その一つ(a)に於いては、第15節に於いて[道具に記号を付けた場合]の様に、その多くの部分から構成されている物(箒、椅子、机、等々)が名前を持っているのである；もう一つの場合(b)に於いては、部分のみが名前を持っており、部分から構成されている物は、部分の名前によって記述されるのである。——そうだとすると、第2の仕方で行なわれる言語ゲームに於ける命令は、如何なる意味で、第1の仕方で行なわれる言語ゲームに於ける命令の、分析された形であるのか？ 第2の仕方で行なわれる言語ゲームに於ける命令は、第1の仕方で行なわれる言語ゲームに於ける命令の中に、言わば隠されており、それが今や分析によって取り出されるのだ、とでも言うのか？——確かに、人が柄と刷毛を分離すれば、箒は分解される；しかし、だからといって、「私にあの箒を持ってきて！」という命令もまた、「私にあの柄を持ってきて！」という命令と「私にあの刷毛を持ってきて！」という命令に分解されるのか？[勿論、そんなことはない。したがって、「私にあの箒の柄とそれが刺さっている刷毛を持ってきて！」という分析された命題は、「私にあの箒を持ってきて！」という通常の命題と同じ事を行なうのではないのである。]

61. [対話者は言う。]「しかし、そうは言っても君は、(a)に於ける或る一定の命令は(b)に於ける或る命令と同じ事を言っているのだ、という事を、否定しはしないであろう；そして、もし(b)に於ける命令が(a)に於ける命令の分析された形でないならば、君は一体(b)に於ける命令を何と

言おうとするのか？」——[ワイトゲンシュタインは答える。]確かに私は、(a)に於ける命令は(b)に於ける或る命令と同じ意味を持っている、ということもあろう；或るいは、先に[第60節で]言ったように、それらは同じ事を行なうのである、ということもあろう。そしてこの事が意味しているのは、こういう事である：もし私に例えば(a)に於ける或る命令が示され、そして、「これは、(b)に於けるどの命令と同じ意味を持っているのか？」或るいはまた「これは、(b)に於けるどの命令と矛盾するのか？」と問われるならば、私はこれらの問いに対して、[(b)に於ける命令を挙げて、]これこれと答えるであろう。しかし、そうは言ってもこの事によって、我々は「同じ意味を持っている」とか「同じ事を行なう」という表現の使用について一般的合意に達している、という事が言われているわけではない。つまり人は、[依然として]こう問うことが出来るのである：如何なる場合に我々は「これらは、単に同一のゲームの二つの異なった形にすぎない」と言うのか？

62. 例えば或る人が、(a)に於ける命令と(b)に於ける命令が与えられる場合、要求された物を運ぶ前に、[何れの場合にも]名前と像が相互に対応づけられている表を調べなくてはならない、という事態を考えよ。この場合彼は、(a)に於ける命令を遂行するときと、それに対応する(b)に於ける命令を遂行するときとで、同じ事をしているのか？——[これに対する答えは、或る意味では]イエスであり、[また別の或る意味では]ノーである。君は「両方の命令の眼目は同じである。」と言うことは出来る。この場合、私もまた同じ事を言うであろう。——しかし、人は何を命令の「眼目」と呼ぶべきなのか、という事は、何時如何なる時でも明らかである訳ではないのである。(同様に人は、或る物について、その目的はこれこれである、と言うことが出来る。これは電灯であり、照明に用いられる、という事は、[その物にとって]本質的である。——[しかし、]それは部屋の飾りであり、空間を満たしている、等々、という事は、[その物にとって]本質的ではない。しかし、本質的と非本質的が常に明確に分離されている訳ではない。)

63. しかし我々は、(b)に於ける命題は(a)に於ける命題の「分析された」形である、という表現によって、やすやすと誘惑され、(b)に於ける命題

の方が基本的である、とか、(b)に於ける命題が初めて(a)に於ける命題で意味されている事を示すのである、とか、等々、と考えるようになるのである。例えば我々は、こう考えるのである：分析されていない形のみを持っている人には、分析が欠けている；しかし、分析された形を知っている人は、その事によって、全てを持っているのである。——しかし私は、分析された形を知っている人には、分析されていない形のみを持っている人がそうであるように、[別の意味ではあるが、] 事態の或る相貌が失われているのだ、と言えないであろうか？ [言えるのである。]

64. 第48節の言語ゲームを以下のように変更する、と想像しよう：そこに於いては、名前は、[第48節の言語ゲームの様に] 或る色の正方形を表わすのではなく、二つのその様な正方形から成り立っている長方形を表わすのである。[そして例えば、] その様な長方形で、半分が赤で半分が緑のものは「U」と言われ、半分が緑で半分が白のものは「V」と言われる、等々、なのである。[さて、] 我々は、その様な色の組合せ [の長方形] に対しては名前を持っているが、個々の色 [の正方形] に対しては名前を持っていない人間を、想像出来ないであろうか？ [想像出来る。] 我々が「この色の構成 (例えば、フランスの三色旗) は或る全く特別な性格を持っている。」と言う場合を考えよ。

この [変更された] 言語ゲームの記号 [(名前)] は、如何なる意味で分析を必要とするのか？ そもそもどのくらい、この [変更された] 言語ゲームは、[その基になった] 第48節の言語ゲームによって、置き換えられ得るのか？——この [変更された] 言語ゲームは、当に、別の言語ゲームなのである；たとえ、第48節の言語ゲームと同系であるとしても。